NHKART

掲載記事：電波タイムズ　2014.12.12号

主役たちの心理的な表現を風景で表す

1914
幻の東京
よみがえるモダン都市

③ 撮影からVFXまで

全編4K制作に挑戦

番組の主役となる当時の民衆をVFXショットで合成した（©NHK）

NHK／NHKアート

ＮＨＫは今年の1月1日に総合テレビで放送した「１９１４・幻の東京～よみがえるモダン都市～」（放送時はハイビジョン）は、撮影とＶＦＸの制作をすべて４Ｋで行うという前例のない番組制作を行った。この番組はＮＨＫオンデマンドにおいても10月下旬から2Ｋ版が配信されており、視聴数も順調に伸びているという。この画期的な取り組みに携わったＮＨＫ大型企画開発センターのシニア・ディレクター貴志謙介氏、撮影機材の選択や素材の管理・現像を担当したカードバンク・コミュニケーションの小島英雄氏、ＶＦＸ制作を担当したＮＨＫアートのデジタルデザイン部ＣＧ・ＶＦＸ担当部長林伸彦氏に話を聞いた。

（第3回／全4回連載）

当時の熱き民衆たちを描くのがテーマ

緑山スタジオでは、絵葉書の背景を元にしたレイアウトに、民衆が違和感なくはまるようにそれこそ一寸の狂いも許されない状況の中での撮影が行われた。撮影は天候にも恵まれ、ほぼ予定通りにこなすことができたという。その撮影の際の４Ｋカメラなどの機材コーディネイトに携わった小島氏は、５種類の４Ｋカメラを使用して撮影に臨んだ。ただ、撮影を開始した当初は、４Ｋの放送フォーマットが決まっておらず、撮影に不安を感じていた。

「撮影全体の素材データ量を踏まえ、合成、編集時に負担のかからないように、少しでも減らしていきたいという思いがありました。そのような中で貴志さんが、そのシーンに望ましいコマ数で撮るのが良いのではないかと提案してくれ、ドラマ部分は24コマ、現代シーンは30コマ、ドキュメントパートは今回の放送フォーマットに近い60コマで撮りました。実験番組として、本当に実験的なことをやっているんです。４Ｋカメラにしても、その当時ラインアップされているものを全て使いました」（小島氏）。

メーカーの厚意もあり、４Ｋハイスピードカメラでの９００コマ撮影（ＦＴ－ＯＮＥ）ではメーカーの技術者立会いのもとカメラを使用することができたという。これによりメーカーの技術者でないと操作できないカメラも使用することができた。ちなみに撮影のメインで使われていたのがソニーのＰＭＷ－Ｆ55であった。「（理由として）Ｆ55は音声入力（ＸＬＲ）がしっかり設定されているからです。それでもバックアップのため音声はレコーダーで別録もしていました。ただ、その場で音が映像に同期している方が、テレビの考え方としては後処理がすごくラクなのです」（同）。

ちなみにＦ55以外では、空撮や群集のスロー撮影などにＲＥＤｅｐｉｃ、高速ハイスピード撮影シーンでＦＴ－ＯＮＥ、電車の車窓シーンでＰＸＷ－Ｚ１００、ＧｏＰｒｏ３（テスト使用のみ）を番組では使用している。

当時の４Ｋカメラは、まだ制作コンテンツ数が圧倒的に少ないこともあり、メーカーの方で実証されていないことが多く、いわゆる〝想定外〟な使い方をして、その特異な状況を小島氏がメーカー側にフィードバックして、その後バージョンアップするといったことも多々あったという。

また、そのこと自体をメーカー側も望んでいて、メーカーと現場が一体となって、４Ｋカメラの性能向上へつながっていったという経緯もあった。

カメラについては、やはりフォーカスについての悩みが常につきまとったという。

「現行のテレビカメラと比べて何倍も大きい大型センサーなので、ボケ味はとても綺麗ですが、フォーカスの合わせ方が非常に難しくなります。４Ｋカメラビューファーの解像度も１２８０×７２０とフルハイビジョンにも満たないものなので、ピントの確認はＥＮＧカメラ等など通常のやり方では正確に合いません。拡大して確認していくのが前提ですが、動的なものなどカメラマンだけでは追いきれないことが多々あります。レンズの絞り、サイズ、距離、この関係をよく理解することが撮影スタッフには必要です」（同）。

撮影も終了し、合成する作業に入ると、マスク作成して影をつけなければならなかったり、制作期間中は桜の映像が撮れなかったので、スーパーハイビジョンで桜を撮影した映像を提供してもらったりと、ＶＦＸ制作担当の林氏の苦労はさらに続くことになる。多忙の日々を過ごしている中ではあったが、貴志氏はストーリーを展開させていく中で、ひとつ林氏にリクエストをしていた。

「今回は当時の熱き民衆たちを描くというテーマがありました。最後の仕上げは相談しながら、だんだんと風景に感情的なエフェクトを入れて欲しいという貴志さんのリクエストに応え、空の感じ方、あるいは光の感じ方を当時の人々の感情が感じられるように仕上げています。このような表現方法にすることで、ＶＦＸの表現として番組の内容に合うゴールを見つけられたなという思いがあります」（林氏）。

貴志氏は、「私としては、心象風景にして欲しいということでした。ただの物理風景ではなくということです。ストーリーの展開に従って、主役である民衆の気持ちが変わっていく。それに従って風景の見え方が変わってくる。民衆の心理的な表現を風景で表したかったのです。そうすると、また映像をいじらなくてはいけなくなり、さらに作業が大変になるのですが、事前にスタッフともシナリオを共有していたので、イメージについてもある程度シェアできていたと思います。よって、そのような大変な対応も柔軟にやってもらうことができました。それでも作業量は増えるのですから、かなり無理なお願いだったかもしれません」。

(C)電波タイムス社